

第35回全国大会を終えて

大会実行委員長 前田 哲宏(龍谷大学)

2024年8月10日・11日、大阪商業大学に於いて、「生成AIで変化する世界と英語教師の信念」をテーマとし、第35回全国大会が開催された。二日間で延べ人数にして、449名の方にご参加いただき、盛況のうちに閉会となった。まずは、ご参加いただいた方々に対して、また、ご発表いただいた方々に対して、この場をお借りして深く御礼を申し上げたい。

この全国大会のプログラム作成にあたり、実行委員長を拝命した私がまず考えたことは、今の「流行り」を根底から疑うこと。換言すると、批判的考察をすることである。昨今、英語教育界では「言語活動」、「目場状」、「思判表」、「個別最適化」、「指導と評価の一体化」などのことばが飛び交い(これが「流行り」である)、それに対する対症療法の話で持ち切りである。それはそれで必要なことではあるが、それだけでは学会としては物足りない。本学会が、「学会」と名乗っている以上、これらの流行を根底から疑い、立場を超え、国の施策を超え、自由に英語教育を議論する場である必要がある。まず疑わないと、本当にそれら「流行り」が正しい方を向いているのか、間違っているのかわからないではないか。「学会」と名乗っているながら、自由な議論や批判的考察を行う場が失われつつあることに、私はある種の危機感を感じていた。そのような思いで、シンポジウムのタイトル「英語教育再考」を考え、三名の先生方にご登壇いただいた(本当は「英語教育再考(サイコー!)」としたかった)。同時に、これからの英語教育についても議論する必要があると考えた。そのことから、「生成AIの活用」と「ユニバーサル・デザインの視点」について、これからの英語教育に不可欠なテーマでお二方の先生にご講演いただいた。ご参加いただいた皆様にとって、少しでも現状を疑い、これからの英語教育を考える機会となったのであれば、この上なく幸いである。

最後に、第35回全国大会の運営にご尽力くださった関西支部運営委員の先生方に対し、ご協力賜ったことに心より感謝申し上げます。皆様方の無償の愛がなければ、この大会が成功裏に終わることはなかったと言えましょう。閉会后、私は皆さんに、「このメンバーで学校作れたら毎日楽しいはず。何のストレスもない。」と述べた。そう述べてから、実は少し反省した。そう思っているのは私だけかもしれない——。いずれにせよ、私が心の底からそう思ったことは違いなく、この先何十年もこの気持ちを持ち続け、一緒に流行りを根底から疑い、未来を見据えた英語教育をこれからも語り合うことができると切に願っている。

英語授業研究会 第 35 回全国大会レポート

第 1 日(2024 年8月 10 日)

オープニングレクチャー

生成 AI の可能性—英語授業にいかにか活かすか—

講師:水本 篤(関西大学)

水本篤氏より、生成 AI、特に Chat GPT を英語の授業でどのように活用できるかをテーマに講演をいただいた。まず、トランスフォーマーモデルの基礎的な仕組みについて簡潔な説明があり、続いてプロンプトの作成における重要性が強調された。具体的で詳細なプロンプトを繰り返し工夫することが、効果的な利用につながるということである。また、AI が誤った情報を生成する「ハルシネーション」への対処として、ファクトチェックの重要性が指摘され、それを授業で実践するための方法も提案された。

さらに、AI が生成した文章を生徒や学生が提出した場合、それを見抜く方法についても議論があった。特に、一般的に使用されている検出方法の信頼性が低い点について注意が促された。講演では、中学生の英語授業における具体的な AI 活用例が紹介された。学校での導入に際しては、保護者の同意を得ることや、教師が生徒の前で実演を行うことの重要性が強調された。また、「AI の普及で教員が不要になるのか」という問いに対しては、教師の役割がむしろ重要になると述べられ、リテラシー教育の必要性も含めて、教育の方法を進化させていく必要があると結論付けられた。講演は非常に活発な議論を呼び、質疑応答の時間にも参加者から多くの質問が寄せられた。

木村 祐太(金沢市立西南部中学校)

映像による中学校授業研究協議

中学校3年:人権意識を高める英語授業を目指して

—留学生と多文化共生について語り合う—

授業者:山崎 寛己(新潟市立下山中学校)

分析者:加賀田 哲也(大阪教育大学)

新潟市立下山中学校の山崎寛己先生より、「中学校3年:人権意識を高める英語授業を目指して—留学生と多文化共生について語り合う」というテーマでご発表いただいた。キング牧師のスピーチを扱う教科書の単元と関連させながら、「多文化共生」をテーマに、生徒たちが過去と現在に存在する人種差別について深く考えることを目標にした授業を提案された。本時は、差別についてペアでプレゼンをしながら復習をし、身近な「修学旅行」などの話題で導入された。この導入は、生徒が差別問題をより身近なものとして捉え、個々の経験と結びつける役割を果たした。次に、日本で暮らす外国人が感じる差別に関するアンケート結果をもとにペアで話し合い、自分の考えをまとめる活動を行った。この過程を通じて、生徒たちは異なる意見や視点を尊重し、自分の意見を論理的にまとめていった。そのあとの留学生との交流会では、差別事例を紹介する短いプレゼン発表をしたのち、留学生からの質問や考え、日本で経験したことを伝えてもらうという授業計画である。

単元全体を通し、「多文化共生」というテーマについて、アンケートの提示や先生からの問い返し、実際に留学生との交流という場面があり、生徒たちは深く思考する機会を得ていたように思う。また、他の生徒の

意見に耳を傾けることと、自分の本音を語ることが両立できる教室の雰囲気であった。生徒たちは、これまでも生徒会活動を通して多文化共生について学んできており、さらに英語科の授業でも海外の人との交流をしてきた経験もあり、留学生との交流会でも、積極的に自分の思いや考えを伝えあっていた。普段から一人ひとりが大切にされ、自分の意見を尊重してもらえるからこそできる授業であったと感じる。

田中 桜(三木市立緑が丘中学校)

第2日(2024年8月11日)

レクチャー

読み書きのつまずきと指導方法

—ユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業づくり—

講師:雪丸 尚美(北九州市立大学)

大会第2日目のレクチャーとして、雪丸尚美先生よりディスレクシアをはじめとした英語の読み書きへの困難を抱える子どもたちへの実態と指導の在り方についてご教授いただきました。

まず、ディスレクシアの子どもたちが抱えるディコーディングの自動化の難しさや英語の読みに必要なスキルについて説明がありました。音の認識・操作、文字の認識や音と文字のつながりにいたるまでたくさんの過程を経て、人間が文字を知覚し理解することを認識することができました。また、そうした過程を理解することで、ディスレクシアの子どもたちへの支援の在り方を考えることができるが分かりました。

次に、実際にどのような指導がディスレクシアの子どもたちにとって有効であるのかレクチャーいただきました。音素を取り入れた発音指導や英語の音節を意識させた指導など具体的な事例も交えながら学ぶことができました。そもそも日本語がモーラ(拍)が重視されており、英語の音素と大きく異なることが印象的でした。そうした違いを教師側が把握をすることで文字の認識・理解につながっていくと実感しました。また、文字の形をイメージする方法として、Lucida Sans など文字の形をイメージしやすい字体について教えていただきました。

最後に、実際のディコーディング指導をしている動画を見せていただいた際、子どもが徐々に音と文字を結びつけようとしている姿に感銘を覚えました。オンセット指導に有効な教材(アプリ)等も紹介していただき、これからの指導に役立てることのできる貴重なレクチャーとなりました。

中野 裕太(神戸市立葺合高等学校)

映像による高等学校授業研究協議

高等学校 1 年: 英語コミュニケーション I

—生徒が題材を自分事と捉え、深く考える指導の工夫—

授業者: 中島 利恵子 (新島学園中学校・高等学校)

分析者: 津久井 貴之 (群馬大学)

生徒が主体的に教科書本文と向き合えるようにしたいという中島先生の強い思いから、目的・場面・状況の設定がしっかりと作られていて、その中で教師と生徒の教科書内容についてのたくさんの英語のやりとりがあるという授業でした。

生徒は予習を(教科書を開くことさえも!)禁止されています。そのため、生徒は、教科書本文を「カレーの歴史について発表することになったクラスメイトの作文」として与えられ、「友人の作文修正を手伝う」という設定に入り込んでいくことができます。作文修正に使われるカレーの歴史にまつわる新情報が、中島先生の友人のインド人から得た話として伝えられることも、生徒の興味をそそります。さらにゴールには、各人が作文を仕上げ、それをもとにしたネイティブとの 1対1の面談テストも設定されていました。

授業映像には、指名された生徒の発話内容を他の生徒たちが熱心に聞いている様子が何度も見られました。理由はいくつもあるのですが、中島先生の指名の工夫が紹介されました。生徒の授業外での様子や、ペアワークやライティング中の生徒の様子やプロダクションをもとに、発問に合わせて指名する生徒を選んでいるのです。目的・場面・状況の設定や指名の工夫もさることながら、中島先生ご自身が本当に興味を持って生徒の発言に向き合っている姿が、授業をさらに魅力的なものにしていました。

有馬 麻子 (大阪府立富田林高等学校)

シンポジウム

英語教育再考—英語教育の目的とは—

登壇者: 大津 由紀雄 (慶応義塾大学名誉教授)

直山 木綿子 (関西外国語大学)

三浦 孝 (静岡大学名誉教授)

司会: 泉 恵美子 (関西学院大学)

本会を締めくくるシンポジウムでは、「英語教育の原点に立ち返る」をテーマとし、大津先生、直山先生、三浦先生にご登壇頂いた。

シンポジウムは、大津先生の「ことば」への本質的な問いで始まり、国語(教育)と外国語(教育)との連続性、そして、外国語教育の「目的」と「目標」の違いやそれによる現在の外国語教育が抱える問題や課題が提起された。次に、直山先生は、外国語教育における「見方・考え方」に焦点を当て、学校だけでなく社会全体として、いかにして子どもを教育していくのかという外国語教育の特質・役割について論じられた。最後に、三浦先生は、ヒューマンスティック英語教育の観点から、教育の第一義である「人格の完成」に言及し、外国語教育の本来の目的が失われた、「目標追従型の授業」に対し、具体的なモデルを提唱された。

これらの議論を通じ、個別の言語間に優劣は存在しないものの、国際的な共通言語としての英語の優位性を認めながら、英語教育の「目的」や「目標」に関する新たな視点が再確認された。さらに、時代の流れに沿った英語教育の「目的」をいかに実現していくべきであるかを改めて深く考えさせられる契機となった。

これらの論点は一見、三者三様の考察に見えるが、その根底には、「豊かな人格の形成に資する外国語教育」という共通の理念が横たわっており、その授業実践における揺るぎのない信念や哲学に対し、会場はただただ、大きく深い頷きを繰り返すのみであった。

シンポジウムの最後には、日本の英語教育の発展に多大に寄与された偉人への敬意、謝意のみでなく、あとに続く者として、参加された全ての英語教育に携わる者の信念・覚悟が込められたかのような重く力強い拍手が長く会場を満たし、本会は閉幕した。

三山 寿紀(大阪商業大学)

お詫び

関東支部の不手際により、昨年度秋季大会の内容を掲載した会報を発行できていませんでした。ご関係の皆様および会員の皆様にこの場を借りてお詫び申し上げます。

以下に改めて両支部の秋季研究大会についてご報告いたします。

英語授業研究学会 関西支部 第34回秋季研究大会

2023年11月19日(日) 大阪商業大学

映像による研究授業と研究協議(中学校)

自由進度学習における生徒の学びと教師の役割 ～選択・決定・行動を生徒に委ねる～ (中学1年生)

授業者:横山 聖(枚方市立長尾中学校)

分析者:中西 浩一(平安女学院大学)

映像

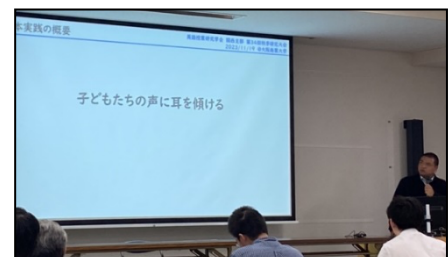
比較→1964年東京オリンピック入場/2021年東京オリンピック入場/2023年高校野球夏の甲子園入場

1964年の入場は選手全員の手足が揃っているが、2021年は自然な笑顔で手を振りながら自由な入場

2023年夏の甲子園も1964年のオリンピックと同じ

では、現在の学校の体育祭(体育大会)の入場はどうか?

➡入場行進:手を揃えて足を揃えて…本当に子どもがやりたいのか?何のためか?



『なぜ私たちに何も聞かずに決めたのですか?』

→ コロナ禍で卒業式が取り止めになった時の子どもたちの意見 から

大人:【教育観】のアップデートが必要

Purpose: Why you do something or why something exists

Goal: Something that you want to achieve

Means: The way to get goal / purpose

自由進度学習(目標設定→学習→振り返り)

個別最適な学び ⇨ 協働的な学び

- ◆ 単元末の活動を共有(定期テスト含む)
- ◆ スケジュールの共有
- ◆ 学習内容(提出物含む)の共有
- ◆ 目標設定の例の共有(事前の生徒アンケートから)
- ◆ 目標設定及び振り返りの共有、ポートフォリオ化
- ◆ 使用するワークシート等の共有
 - Google Classroom でモデル動画(音声あり)を共有し生徒が自由に使える
- ◆ 学習環境の整備
 - 学習の可視化: 掲示物の充実、単語カードを使用し語順を自由に確認できるスペース
 - 廊下に机を設置して自由に使える: 10分間ルール(砂時計を設置してその間は自由に使える)
 - 机の横にイヤホンを設置

学校教育への疑問

- 子どもたちが「もの言える」学校になっているか?
- 教師と子どもは対等ではいけないのか?
- 教育活動、教育施策は本当に子どものためになっているか?
- 教師の経験のみで語っていないか?
- 何かを決定する時に子どもたちも当事者になっているか?
- 伝統という言葉をやたらと使っていないか?

映像授業

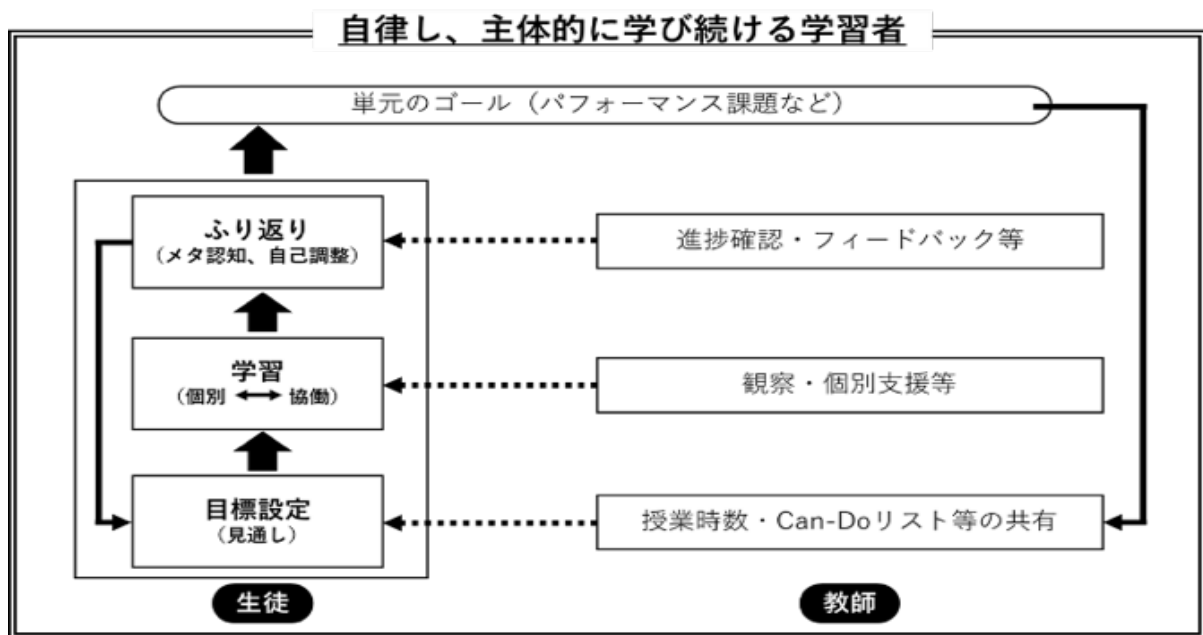
- 学び出すタイミングは一人ひとり違うため『待つ』ことも必要
- 生徒が寝る・関係ないことをしていても、まずは観察を重視
 - 何に困っているのかを見極め、声かけを行う
- 『自分の行動は自分で決めて良い』と安心・リラックスして授業を受けられる環境づくり

アンケート「Q:自由進度学習は計画的に進んでいますか?」 → 87%肯定的意見 / 13%否定的意見

- 自分に合っていないから
 - デメリットが多すぎる
 - どっちでもいい
 - 自由進度学習を無くして普通に授業受けたい
 - 難しいから、苦手だから
- こういった子どもたちの声も受け止め、授業づくりにつなげていくことが大切

子どもの声を聞く

映像(学習障害を持つ子どもたちが先生に宛てた、重要なメッセージ「イミシンより」)



(図2) 単元内自由進度学習のイメージ

【中西先生より】

Q:この取り組みは学校として行っているのか？

A:1年生の英語科だけである。

学校として取り組むことができれば、すごい可能性を秘めているスタイルになるのではないかな。

Q:ひとりぼっちとひとり学びは違うが？

A:よく観察し、必要に応じて子ども同士を繋げる声かけするようにしている。

幼児教育では行われている自律的な学びが、小学校に入ると否定される。学びの接続が大事。

多様で公平で、包摂的な未来を生き抜く子どもたちが、それらが尊重された環境(学校教育)で自由進度学習をとおして個に応じた学習スタイルで学びを深めていく様子が伺えました。授業では自己調整がキーとなり、自ら考え課題を抱き、またその解決法を自ら見つけ出す体験が自然となされており、その結果が授業アンケートで子どもの声を聞いたときに87%の肯定的意見を産み出していると感じました。中学校1年生から個別最適な学びのスタイルを確立し定着を図るためには時間は要するかもしれませんが、『子どもたちの声を聞く』ことについてもう一度考え直す良い機会となりました。

小林 友希(河内長野市立西中学校)

映像による研究授業と研究協議(高等学校)

論理・表現 I AI を活用した新しい授業への挑戦～個別最適化の実現をめざして～(高等学校 1 年)

授業者: 豊嶋 正貴(文教大学附属中学校・高等学校)

分析者: 松下 信之(大阪府教育庁)

学校現場はもちろん、生成型 AI がさまざまな場面で注目されています。特に文章生成では、細部の言い回しや語彙選択に依然課題はあるものの、その精度の高さから、学習分野でも大きな影響を与え始めています。英語授業における AI 活用は、生徒の学習にどのような影響を与えるのか、またどのように英語授業は変わっていくのかを考える貴重な発表であったと感じます。

豊嶋先生は、論理・表現 I で利用している教材の単元ごとに重点技能を設定され、映像による研究授業では、授業の円環と中間指導を大切に、次のように授業展開を工夫しています。生徒自身で取り組む家庭学習、目的・場面・状況の設定と提示、モデルの提示、モデルを使った中間指導、アウトプット活動(AI による英文添削)、英語の清書及び練習、クラスでの共有、オンラインプラットフォームでの生徒作品の共有、相互コメント、AI によるフィードバック後のリライト、オンライン英会話の活用という流れです。

英語授業において、「書くこと」「話すこと」を学ぶ際、生成型 AI を活用することについては、さまざまな意見・議論があります。問題集にある日本語を英語にする際、または自分の考えや意見を英語で表現する際、流暢に適切な英文構造で英語を話す(書く)ことのできる生徒は、クラスに何人いるでしょうか。生成型 AI が提示した英文と自分の英文を比較検証することを通じて、生徒は表現の引き出しを増やしていくことができるのかもしれません。生成型 AI の英訳は、答えではなく、いくつか存在している表現の 1 つにしか過ぎません。生徒が多様な表現にどれだけ出会っているのかにより、生徒がより自分らしい表現を習得していくサポートとなる可能性があります。豊嶋先生の発表から、生成型 AI は是か非かということではなく、生成型 AI の活用をチャンスととらえ、何の目的で、どの場面で、どのように活用するのかという視点の重要性を再認識することができました。

森田 琢也(大阪教育大学附属高等学校池田校舎)

オンライン講演

「学習のための評価を実現する視点: 全国学力・学習状況調査をもとに」

講演者: 高木 修一(福島大学)

司会: 加賀田 哲也(大阪教育大学)

現行学習指導要領における「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」の3観点評価に関して、私達はより効果的で信頼性の高い学習評価の在り方について、日々悩み、試行錯誤をしているところだ。今回、高木先生からは学習評価の仕組みについて、多くの事例を交えて丁寧にお話をいただいた。「例えば、私はどれくらい泳げるでしょうか」と高木先生は冒頭で問いかけられた。「評価」をすることは、評価者が情報を収集して推測する行為であり、評価の精度を上げるためには、より質の高い情報を収集する必要がある。目の前にいる生徒が、泳ぐことについて、どれくらい知識を持っているかを測るには、ペーパーテスト等が適切だが、どれくらい泳げるのか測定するには、実際に泳がせないと判断できない。測定したい力とその方法が上手くマッチしているかは大事な要素の一つである。また評価する際にかける労力やコスト、実用的かどうか他、適切な「評価」をする上で考慮すべきことが多々ある。

合わせて、学習評価は、学習者自らが、自身の学習状況を振り返り、できていること、足りないことを認識した上で、次の学びへどう向かっていくかを考えるために必要である。高木先生からは、3年ぶりに実施された今年度全国学力・学習状況調査における英語問題の解答分析を使いながら、細かくお話していただいた。そこでは学習者は、単にその結果や正答率だけに注目するのではなく、自分自身何ができて、どこで間違っていたかを振り返り、次の学びに活かせるように解答結果を活用することが大切だということだ。

「指導と評価の一体化」と言われて久しいが、学習評価の仕組みについて、私達はまだ理解したつもりでいることが多いのではないだろうか。今後、実施していく上で考量すべきことへ有益なヒントを数多くいただけたご講演だった。

富藤 賢治(藤井寺市教育委員会)

英語授業研究会 関東支部 第29回秋季研究大会

2023年11月23日(木) 文教大学附属中学校・高等学校

映像による研究授業と研究協議

中学3年生「ルーブリックを用いて書く力を高める授業」

授業者:瀬戸 辰徳(群馬大学共同教育学部附属中学校)

分析者:津久井 貴之(群馬大学)

今回、「『貧困問題を改善するためにできること』について、考えや事実をまとめて書くことができる」をゴールとした授業をご発表いただいた。多くの授業で writing 活動は行われていることだが、瀬戸先生の授業から、writing 活動をするうえで、読み手を意識させることの重要性を改めて感じた。授業の中で、クラス全体での意見共有をする際、根拠を添えて意見を述べることの重要性を伝えたり、友達同士で文章を読み合いフィードバックをするなど、「相手を意識した」writing 活動となるような工夫が随所にちりばめられていた。そうすることで、生徒は、より伝わりやすい文章にしようという意識を持ちながら授業に参加できるのではないだろうか。さらに、Can-do リストも効果的に活用し、Can-do リストを参照しながら振り返りをさせていた点も、次につなげる指導のための工夫であると感じた。また、よりよい授業にするための授業改善を積極的に行っていた点が素晴らしかった。助言を参考にしながら瀬戸先生なりに試行錯誤し、改善を図っている姿は教師として、目指したい姿であると感じた。

英語はコミュニケーションを図るためのツールであり、相手がいこそ、コミュニケーションが成り立つ。だからこそ、授業の中で「相手」を意識させることが大事であると、瀬戸先生の発表から改めて学んだ。自分自身のこれからの授業に生かしていきたい。



小山 優子(千葉県山武市立成東東中学校)

「アノヒロ対談」

登壇者 阿野 幸一(文教大学)

太田 洋(東京家政大学)

午後のプログラムは阿野幸一先生、太田洋先生のお二人による「アノヒロ対談」で始まった。五十嵐浩子先生をコーディネーターに交え、『わかる』それとも『できる』?という主題に沿って対談が展開されていった。対談の始まりは、「それじゃ生徒がわからないです」「英語ではなく日本語でやってください」という、アノヒロのお二人が実際に聞いた現場が抱える悩みや実情の共有からであった。この共有を皮切りとし、本対談のテーマ設定に関わる学校教育現場の実情が語られていった。最初に、「全国学力学習状況調査」に関する話題が挙げられた。お二人の話によると、近頃、教員研修の内容が変化してきているようだ。それは、学力状況調査の結果を踏まえた授業改善についてだという。しかしこれらの研修の軸が、授業改善を求めているのかまたは、テストの点数を取るためにどのような授業をすればよいかということであるのか。文法などのルールを知っていたとしても、それを実際のコミュニケーションの場で使用することができることに繋がるのだろうか。「わかる」と「できる」は異なるものではないだろうか。などと、様々な視点から意見が投げられ、問題提起がされていた。



このような現場の苦しい現実が語られる中で、宮城県古川高校と川崎市立有馬中学校の実践例が紹介されていた。両校で行われている授業に共通することは、教員と生徒の間または生徒同士で英語を用いたやり取りが活発に行われていることが挙げられるだろう。また、各教員から発せられる問いかけは、生徒が本文に繰り返し触れるための仕掛けになっているという。太田先生は、教科書本文の読解を何度も繰り返す中で、最初はその内容や表現などがわからなかったとしても、徐々に霧が晴れてわかるようになることを、生徒に体験してもらうことが必要だと述べていた。

ここで「教員の役割」に話題が切り替わり、それは、「なるほどねー」を与える役であるという。例えば、生徒が「この単語言いたかったんだよね」「この表現を知りたかったんだよね」と感じたときにアドバイスをくれたり、キーワードやフレーズをリピートしたりする機会を与える役であるのだという。教員は生徒にとって、先述したように言語に対する霧が徐々に晴れるような経験をしてもらうための役割なのだ。そのためにも、教員自身が「わかる」と「できる」に対する捉え方を変化させていかなければならないことも言及されていた。ここから話題は「自律的学習者」に焦点が当たる。結論としては、生徒だけに活動の全てを任せるだけで、生徒が自分から学習していくとは限らないということだ。そのためには、教員の存在は欠かせないという。この話題は、先述した「教員の役割」にも関連する。生徒にとって必要なときに必要な支援を与えられる教員がいなければと、「はっ」とさせられる話題であった。さらに、自分が勤務する校種と異なる校種の教科書を見定めることで、「生徒がひとりで学ぶためのヒント」を得られるようだ。ぜひ、参考にしたい。

最後に「評価」に話題が移り変わった。教員が適切に評価を行うためには、「何を教え、何を評価するのか」を見定めることが欠かせないという。これに関連した話題として、語彙指導について具体例が挙げられていた。中学校の教科書に掲載されている文章量、語彙の増加に伴い、生徒が身につけるべき単語の見極めと、「読んでわかる」「書くことができる」などの程度を教員が理解し、語彙を活用できるような学習活動

を組み立てる力が求められているということだろう。教員も自身の役割を見直し、アップデートし続けることが必要だと改めて実感できた対談だった。

兼岩 明日香(新島学園中学校・高等学校)

映像による高校授業研究協議

「生徒の主体性を育む授業を再考する」

授業者: 中島 利恵子(新島学園中学校・高等学校)

分析者: 久保野 雅史(神奈川大学)

1. 「王道の授業」PCPP(Presentation-Comprehension-Practice-Production)

「これぞ英語の授業の王道」(分析者の久保野先生)という授業で、圧倒されることばかりでした。題材の鹿児島県屋久島が題材の単元でした。単元のゴールは、屋久島についての新聞記事作成だったそうです。中島先生が屋久島エコツアーガイドとして、屋久島について説明し、途中には生徒同士で意見交換させるような質問、クイズなどがありました。生徒は、大変に熱心に説明を聞き、聞き取った内容に対するクイズに答える活動を通して、より内容理解を深めていく流れでした。分析者の



久保野先生が「王道の授業」とお話しされたように、1つ1つの活動が一本の線のように本時の目標に向けて繋がっていました。活動と活動に切れることなく seamless になっていて、自然な流れで授業が進行されました。中島先生が Teacher Talk の台本を用意して授業に臨んでいらっしゃるから分かるように、素晴らしい授業には綿密な準備が必要であると改めて確認することができました。

2. 英語の授業と合唱コンクール最優秀賞と

中島先生が担任をしているクラスが合唱コンクールで最優秀賞を取りました。その練習の過程は、まさしく授業中の生徒の変容の過程と同様であったと思いました。中島先生のクラスの合唱への取り組みが大きく変化したのは、他のクラスの合唱を聴き、自分たちの歌との違いを知ったことがきっかけでした。それは、授業の「中間評価」「相互評価」にあたるものだと思います。そこで、「向上したいという思いが動き出した」、つまり「主体的に学習に取り組む気持ちが態度として出てくる」ことにつながったそうです。生徒が自主的にミーティングを開き、自主練習が始まり、練習を重ねるうちに自分たち自身でも上達してきたことがわかったということです。これは、自己肯定感、達成感を得たということだと思います。中島先生のお話から、教師に必要なことは、教えることのみではなく、「生徒に委ねる」部分を教師が決めておく「余白」が大切なのではないかと思いました。「生徒は任せられた時に、力を発揮する。」という言葉が印象的でした。私も、余白があり、生徒に任せる場面がある授業を作りたいと思いました。

土屋 雅徳(川崎市立有馬中学校)

<「会報」バックナンバー提供のお願い>

バックナンバーの収集は、皆様のご協力のおかげで 88%まで来ており、※の 10 号分が集まれば完成となります。以下の「会報」がお手許に残っている方は、是非とも久保野までお知らせ下さい。紙媒体でもファイルのどちらでも構いません。ご協力よろしくお願いします。

※ 1990 年代:28 号、32 号

2000 年代以降:47 号、65 号、69~71 号、73 号、75~76 号

<編集後記>

昨年の授業や企画をほぼ 1 年後に振り返るという変則的な編集になったことをまづもってお詫び申し上げます。ただあることにも気づきました。月日の過ぎ去るのは速いものですが、この 1 年前の自分と今の自分を比較して、変わったこと、伸びたこと、改善されたこと、新しく始めたことは一体何でしょうかという問いを持つことができました。即時即日、課題を持って取り組み、自己調整を図りながら、自己更新・・・できているでしょうかと自問する秋です。